



多角的アプローチが進む天文教育・普及

縣 秀 彦

〈国立天文台 〒181-8588 東京都三鷹市大沢 2-21-1〉

e-mail: h.agata@nao.ac.jp

天文学の進歩および普及を目的とする日本天文学会は、天文学の教育・普及に関して積極的に取り組んできた学術団体です。高等教育のみに目を向けるのではなく、アマチュア天文家・天文愛好家の育成や生涯学習・学校教育への支援等を積極的に行ってきました。例えば、アマチュア天文家の顕彰や内地留学制度、年会時のジュニアセッション、公開講演会、および天文教育フォーラムの開催などです。

しかし、生涯学習施設が休館や縮小あるいは閉館に追い込まれている事態や、小・中学校での理科と算数・数学の学習内容・学習時間の大幅な減少、高等学校での「地学」および「物理」の履修率の低下、さらには、大学法人化と予算削減（または重点化）による国立大学の研究・教育環境の先行き不安等々、私たちを取り囲む環境の変化にはめまぐるしいものがあります。このような、将来、学界の基盤を揺るがしかねないさまざまな事態に対し、学会および学会員の一人一人は、さまざまな機会を通じて積極的に対応する必要があるといえましょう。

今回の特集「多角的アプローチが進む天文教育・普及」では、2回連続で教育・普及に関する先進的な実践事例を紹介します。これらの事例からは、21世紀型の科学教育において、生涯学習・学校教育を問わず、専門家のかかわりが極めて重要であることが読み取れます。また、教育関係者と専門家の連携により、市民や生徒を支援する学びの共同体作りが、地域、全国、国際のそれぞれの規模で進んでいることが分かります。

天文学は最も古い学問の一つと言われますが、はるか彼方の宇宙に思いを馳せ、宇宙の中での自分自身の位置づけを考えることは、人間にとって極めて基本的な思考活動であり、科学への入り口として興味・関心を喚起するものです。さらに、科学と社会とのかかわりが重視されるようになった現在、学術文化としての科学の振興においても、天文学のコミュニティーにさらなる活躍が期待されています。良くも悪くも、今までの日本の天文学コミュニティーは規模が小さかったため、研究者も教育・普及関係者も皆、顔なじみで、何でも「連携」がしやすい環境であり体質でした。しかし、これからは、天文学界に閉じることなく、より広範で一般的な「科学」や「文化」における連携が求められることでしょう。まずは、今回の特集で取り上げたような、教育・普及におけるさまざまな「連携」の輪に、読者の皆さん一人一人が次々とつながっていってくれることを願ってやみません。